

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報 2021.03.31

NO.34

- 理事長より
- コロナ禍の学校～心や体の健康をみる養護教諭からのレポート～
- 栃木県支部事務局からのお知らせ

今必要なこと

栃木県支部理事長 柴 一 彌

今年度（令和2年度）、メディアで大きく取り上げられている「子供たちの自殺者の増加」は痛ましい切実な事実です。コロナはひたひたと子供たちの心にまで巣くっていると云いたくなるような状況があります。

警察庁、厚労省調べで、すでに分かっているだけで479名（前年度339名・令和2年度第2回臨床心理士研修会資料から）の命が奪われています。しかしこの数字の背後にはギリギリのところまで踏みとどまって悶々としている多くの若者の存在がいることは容易に想像されます。その要因にはコロナ禍の中、学習、進路、家庭、精神疾患などが徐々に浮き彫りになってきているのではと分析され、感染収束の見通しが見えない中さらに事態は悪化するという見立てもあります。

文科省を始めさまざまな機関・組織が自殺予防に関する取り組み（早期発見、危機対応、子供たちのヘルプの出し方、家庭・家庭外の見守り体制、ネット上の監視、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの社会資源活用 etc.）を一層強化していることはご存じのとおりです。

私は、教育に関わる自分自身がもう一度立ち位置を仕切り直し、足元をしっかりと整え、そして目の前の子どもたちの有様（ありよう）を虚心坦懐に観ていく真摯な姿勢、今だからこそ感じています。

そこで最近心に届いたいくつかのドキュメント、TVドラマの解説・台詞を思わず書きとどめましたので紹介します。

・NHK「クローズアップ現代プラス」より。

「一月十六日付文科省中央教育審議会答申。…感染拡大を通じて高校の福祉的機能（安全安心な居場所の提供）が再認識された…『令和の日本型学校教育の構築』を目指して」…

実際に教育と福祉の混然一体化した時間が流れている関西の高校が紹介されました。校内に様々な居場所を作り学校を好きになってもらうために、授業中の廊下でも、教科準備室でも、職員室でも、どこでも先生方は叱責せず声をかけるのです。「校内ハローワーク」を設置、外部キャリアコンサルタントが常駐、いづれは社会と向き合う開発的な取り組みもしています。コロナで漠然とした孤独と不安、人と人とのつながりがじわじわと薄くなって分断されていく中、生徒と家庭の様を放っておかない教員集団の力は感動的です。

「学校は最後のセーフティーネットだ」と腹をくくった教師の共通の心意気で一人一人の生徒に寄り添っていくのです。「俺たちって制服を着て学校に来ている生徒の姿しか見ていないし、それ以外の世界は見ていないんだよな」という先生のつぶやきが印象的でした。

・私たちへのこんな戒めもあります

『他者への没頭はそれが支援であれ、妨害であれ、愛情であれ、憎悪であれ、詰まるところ自分から逃げられるための手段である』…エリック・ホッファー・NHKドラマ「今ここから倫理です」より

・次のセリフは私たちへのエールに感じます。

『世界の不幸を一つ受け入れることで誰かが救われている。話せる誰かがいればどうにかなる』…民放ドラマ「にじいろカルテ」より

来年8月の学会「栃木大会」はオンラインを考えています。逐次HPで関連情報をお伝えいたします。

○ コロナ禍の学校～心と体の健康をみる養護教諭からのレポート～

栃木県の緊急事態宣言は、2月上旬で解除されましたが、年末から年始にかけての急激な感染拡大は鬼気迫るものでありました。そして、ワクチン接種の準備が急ピッチで進むものの、依然としてコロナ禍の出口は見えません。

学校でもさまざまな感染対策を強いられ、いくつもの行事や活動の中止が余儀なくされ、授業でも活動が制限され・・・と、影響は少なくありません。それでも、ほとんどの学校では、教師が明るく振るまい、児童・生徒は楽しくかわり、学び合い、通常とそれほど変わらない生活ができています。児童・生徒への深刻な影響は、倒産・廃業、失業、収入減、貧困・困窮、保護者等の生活不安やストレス、在宅勤務・テレワーク、家庭内のトラブルや家族・親子間の人間関係の問題、DV、虐待、閉塞感など、やはり家庭生活の変化によるところが大きいと言わざるを得ません。

今回は、そんな児童・生徒の変調に細心の注意をはらう養護教諭のお二人にレポートをお願いしました。なお、文体が常体と敬体で異なりますが、特に規定はなく、原文を尊重しましたのでご了承ください。

「僅かな変化に気付けるように」

小学校養護教諭 和田朋子

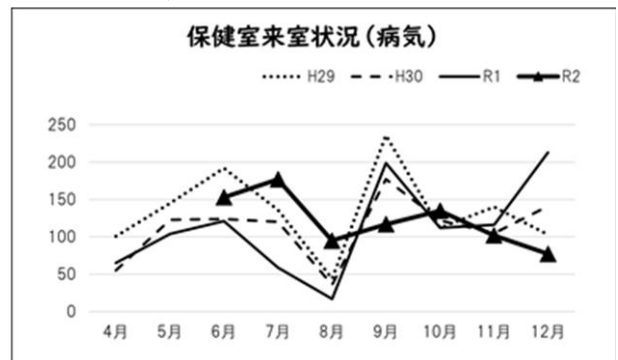
学校が再開して一週間たった日のことである。「ちょっと頭が痛いです」と言って来室した4年生のA子。いつもと違う様子だったので、ベッドで休むことを促し、寝せながら聞いてみた、「何かあったの」。A子は「何かというわけではないんですけど、わかってはいるんですけど」と前置きして、新型コロナウイルス感染拡大防止のため在宅勤務となった父親が家にいること。今までは、帰宅して宿題をした後本を読む等静かな自分の時間を過ごしていたが、今は、父親の仕事の会議の声が聞こえていて気を遣うこと。夜遅くまで仕事をする父親の体調が心配なこと等を語った。今までと違う生活環境になじめず、なんとなく体の不調を感じている様子だった。

A子には、

- ・コロナはいつになるか分からないがそのうち収束すること
- ・これまでと違う生活に違和感があるかもしれないが、今の生活にもだんだん慣れてくること
- ・いつ保健室に来てもいい、また話をしよう と伝えた。

それから、2～3週間たったある日、廊下ですれ違ったA子に調子を尋ねると、「大丈夫です。慣れてきました。」と言って、教室に戻っていった。父の勤務は未だ在宅らしく、コロナ禍の生活に変わりはないようだ。

保健室来室者の内、病気で来室者はグラフの通りである。令和2年の6月、7月人数を例年と比べると6月より7月の方が来室者は減少するところ、今年度は7月の方が多くなっている。この時期、朝食欠食による体調不良が目立った。また、9月、10月を比べると、例年であれば9月より10月の方が減少するところだが、今年度は10月が多くなっている。実際の年度開始が2か月遅れの些細な参考値であるが、例年とは違う状況が見えてくる。



生活状況調査では、メディアの使用時間については、1日に2～3時間が多いが、4時間以上という児童はクラスには数人おり、7時間以上という児童は全体の1%程度いた。

また、登校渋りやクラスになじめない児童は例年に比べ多学年にわたっていた。

現在の来室者は、インフルエンザや胃腸炎等の感染症の流行がない分、昨年より少ない。登校渋り等については、学級づくりに取り組むとともに、全職員で支援にあたり、落ち着きを取り戻しつつある。しかし、この後どうなっていくか、わからない。数か月続いた自宅での生活や環境の変化は、今後どのように児童の心身の健康に影響を及ぼしていくのか懸念される。コロナ禍の制限に真面目に取り組む我慢しすぎではないか、何かしら困っている子がより困ったことになってはいないか、不安を「反抗」や「いじめ」という形で発散していないか等々、気になることは尽きない。とにかく今は、児童の僅かな変化にも気付けるよう心掛けたいと思う。一方、緊張ばかりでは続かない。こんな時こそ笑いが必要！そう言いながら、養護教諭としてできることを考える毎日である。

「Withコロナ時代を保健室登校の生徒たちとともに」 中学校養護教諭 小玉葉子

令和2年3月、校内に一人も感染者がいなくてもかかわらず、感染症対策のための長期臨時休業（学校閉鎖）になりました。これは教員人生で初めての経験で、自分の中でも衝撃的でした。4月、一年生の顔もほとんど覚えられないまま、新年度はたった3日間で再び休業となり、正式に再開したのは梅雨入りが始まった6月1日でした。

この「長期休業」は、長く学校を休むという問題以外に、家庭に長くいることによる様々な困難を掘り起こしたと感じています。ステイホームを余儀なくされた結果、ゲームや動画視聴時間が長くなり、当然のように生活リズムが乱れました。親にとっても、制約が増えた社会生活が閉塞感を招き、家庭内でイラつくことが増えたはず。その結果虐待も心配されました。どの家庭も抱えている何らかの問題、これまで見ないようにしてきた、弱く壊れやすい部分が、コロナ禍により顕在化して、生徒たちに降りかかったように思います。

昨年度、教室にうまくなじめなかった生徒たちの中には、「心機一転、今年こそは教室で頑張るぞ、授業を受けるぞ」と、良い緊張感をもって4月の新年度を迎えた者も少なくありません。しかし、長期休業で「頑張る枠組み」がなくなり、途方に暮れたのでしょうか。7月に入ると、まるで5月病が始まったかのように、保健室を訪れるようになりました。

コロナ禍以前から不適応症状を示していた生徒は、他の生徒よりも社会変化の影響を強く受けたように思います。例えば、最近HSPと言われるような感度の高いアンテナを持つ生徒は、特に息苦しさや生活のしにくさを感じたようです。共感性が高く平穏を好み、物事を深く考え、環境の変化を苦手とするため、社会の不穏な空気を敏感に察して、夏の体育でもマスクを外さず、家でも自室にこもる時間が長くなったと聞いています。

このような困難がありつつも、ふと振り返ると、悪い事ばかりではありませんでした。

その一つ目は、学校行事の削減や縮小により、特別日課や授業変更が少なかったことです。学習の遅れを取り戻すべく、粛々と授業が行われる毎日。それは、急な日課変更や、行事への適応を苦手とする生徒たちにとって、ある意味、平和で穏やかな生活でした。

二つ目は、保健安全部と教育相談部と保健体育科が協力し、急きょ全クラスに授業を実施したことです。テーマは「ウイルスの次にやってくるもの」それは不安と差別。不確かな情報によって不安がつのれば、差別を恐れて体調不良を言い出せず、その結果ウイルスのさらなる蔓延が予想されます。資料は、日本赤十字社に提供していただきました。

最後三つ目は、長期休業を機会に、学校ICTが加速度的に進んでいることです。保健室登校の生徒たちには日頃からタブレットで学習させていますが、特別な支援を必要な生徒にもそうでない生徒にも、学習方法の選択肢が増えることを期待しています。

お二人のレポートをもとに、問題や危機意識、気づきや配慮点などを共有し、子ども達のために、我々学校教育に携わる者として、正しく、ねばり強く、コロナ禍に立ち向かっていけたらと思います。そのとき、学会や会員一人一人が積み上げてきた、学校教育相談の知見や実践は、大いに役立つものと信じています。

(文責 松本直美)

「第34回栃木大会」について

第33回兵庫大会がZoomによる完全オンラインで実施されます。コロナ収束が不透明な状況では来年8月5日～7日「栃木大会」もリモート形式で実施する方向で考えざるを得ません。

今後の実行委員会役員会での検討状況をその都度お知らせしますので、会員の皆様からのご意見、ご提案をお寄せください。どうぞよろしく願いいたします。

今年の兵庫大会の一次案内、二次案内が相次いで皆様にも届いているかと思いますが、支部ホームページにも掲載いたしましたのでふるって申し込みのほどをお願いいたします。

○ 栃木県支部事務局からのお知らせ

開催期日	事業名	会場	備考
6月5日(土) 総会 13:00 講演 13:30	【令和3年度総会 およびカウンセリング特別講座Ⅰ】 講演「子どもたちの語りから見えてくるもの」 講師 宇都宮少年鑑別所 所長：福永瑞恵氏)	栃木県教育会館 大ホール	参加費 無料
7月30日(金) ～ 8月1日(日)	【日本学校教育相談学会第33回総会・研究大会】 大会テーマ『気づき つながり 支えあう学校教育相談～さまざまな課題を乗り越え、多様な個性が輝くために～』	兵庫大会 Zoomによるオンライン (第三次案内参照)	
10月 13:30～16:00	【第38回支部研究発表】 スーパーバイザー：伊澤 裕氏 (詳細未定)	未定	発表者 募集
10月	【第11回 教育相談カフェ】 事例検討会 インシデントプロセス法 (詳細未定)	未定	
11月 13:30～16:00	【第39回支部研究発表】 スーパーバイザー：築瀬のり子氏 (詳細未定)	未定	発表者 募集
11月28日(日) 13:30～16:00	【カウンセリング特別講座Ⅱ】 演題「カウンセリング・学ぶこと・教えること」 講師 キャリアカウンセリング協会特別講師：橋本幸晴氏	栃木県教育会館 大ホール	参加費 無料
12月	【第12回 教育相談カフェ】 事例検討会 (詳細未定)	未定	
令和4年 1～2月	【冬期特別研修】 詳細については決定次第お知らせします	未定	
令和4年 2月5日(土) 13:30～16:00	【精神医学特別講座】 演題「起立性調節障害～根性だけでは治せない病気～」 講師 医療法人菅間病院小児科科長：八木正樹氏	栃木県教育会館 大ホール	参加費 無料

日本学校教育相談学会栃木県支部

〒320-0066 宇都宮市駒生 1-1-6 教育会館

栃木県連合教育会相談部内

日本学校教育相談学会栃木県支部事務局 高松千恵子・佐藤佳子

TEL 028-627-5682 FAX 028-627-5682

E-Mail : jasc.tochigi@gmail.com

ホームページ : <http://t-soudan.sakura.ne.jp/index.html>

(会員の部屋パスワード tb-jascg3123)

発行責任者 柴 一彌

広報担当者 馬場友治・佐藤幹雄・松本直美・平峰孝二